



# 愛隣幼稚園..... 園だより ..... 14. 2月号

## ちょっと待って

今年度の園だよりも卒業するうみ組のお家の方にはあと 2 回となりました。ですから今回は急いで伝えなきゃ！と思っていることを書きます。スマートフォン（携帯電話）のことです。じつは 2 学期の保護者会でも少し話題にしたのですが、やっぱり文字にしてお伝えしておきたいと思いました。急いでいるので結論から。

**“子どもにスマートフォンを渡す前に、そのスマートフォンは子どものために本当に必要か？ということをもう一度考えてみましょう。”**これが結論です。

これで何人かのお母さん、お父さんが子どもたちにスマホを渡してしまうことを、今、思いとどまってくれたら、と私は願っています。何故って、いったん与えてしまったスマホは簡単に子どもから取り上げることができないからです。スマホのある生活が日常化していればもしかするとスマホの無い生活に戻すことは至難の業かもしれません。子どもたちにとってそれは薬物のようなものです。麻友先生から通勤電車の中で出会う親子の話を聞きました。子どもは 2, 3 歳の小さな子だそうです。お母さんのスマホを使いたいとせがみます。お母さんが「これはお母さんがお仕事するものだから。」という「私もお仕事するのっ！」と泣いて騒ぐのだそうです。電車の中です。そうそう騒がせておけるものでもありません。言われるまま子どもにスマホを渡すとアンパンマンのアニメーションを見始めるのだそうです。しかも音つきで。。。心配になりました。スマホではなくお母さんと出来ることが他にあるように思いますが、既にこの子の生活にスマホは必需品です。おまけに使い方には周囲への配慮ありません。幼稚園のお母さんたちからはスマホやDSなどで子どもたちがゲームを始めると、なかなか終わりにすることができない、という話もよく聞きます。何故、子どもたちはそんなに携帯ゲームに夢中になるのでしょうか。そこには「遊び」を楽しく感じるために必要な「スピード、スリル、スキル（技能）」という要素が巧く組み込まれている、と教育学者の汐見稔幸氏が言っています。お手軽に面白い「遊び」を手に入れることができるのですから、これはもう夢中にならないわけがありません。ただそこには泥だらけになったり、汗だくになったり、くたくたになるまで体を使って遊んだあとの達成感や充実感はありません。喧嘩したり、泣いたり笑ったり、喜びを分け合うような仲間とのコミュニケーションも存在しません。寒さ暑さや風を感じるような環境の中へ出かけて行かなくとも、バーチャルな世界でそれを疑似体験することだってできます。が、そこには本来育つべき感性は育たないのです。しかし先にも書きましたがこの道具は子どもたちにとっては魅惑のツール、一度手にして味わった楽しさは忘れることができず、虜になってしまいます。子どもにとっても親にとってもお手軽であるが故に子どもたちの大切な時間が奪われ、本来あるべき家族の時間も奪われてしまうのです。幼児期の子どもたちに必要な道具ではありません。

我が家の娘たちは小学生までは携帯を持たずに暮らしてきました。初めて自分のものとして携帯を所有したのが中学 3 年生。改めて特別の約束もせずに渡してしまいました。今日まで何度「このままじゃ携帯中毒になる！」と心配したことか。昨晚も「こらっ！大学生！ゲームやってる暇があったら本を読めっ！」と言っただけで済みました。あのアメリカのお母さんが息子にスマートフォンをプレゼントする時にしたような約束を私もおまけしておけばよかったと思います。すでに多くの方が知っていらっしゃると思いますが、初耳という方、これは是非検索してみてください。《スマホ 18 の約束》で出てきます。14 番目にはこんなことが書かれています。<時々家に携帯を置いていきなさい。携帯電話は生き物ではないしあなたの一部でもありません。携帯電話なしでも暮らしていけることを覚えてください。取り残されることを恐れるのではなく、流行に左右されない器の大きい人間になりなさい。>はっとしました。自分のことを言われているようです。子どもの問題はほとんどが大人の問題です。私たちが携帯を手放せなくなりこれに依存した生活をしてはいないでしょうか。子どもたちがそれを見てモデルにしていくのです。まず私たちの生活を見直す必要があります。